

# 幼稚園可否の論を讀みて

麴町小學校長 土 川 五 郎

先達「幼稚園に兒童を入るゝの可否」といふ問題が讀賣紙上に出て、山脇房子女史を第一として八人の名士が意見を述べられ、六人の愛讀者が思ふまゝを讀者の聲といふ欄に吐かれた。

これを一々熟讀して見ると中々面白く、吾々幼稚園に關係ある者の參考になる事も多い。識者は曰くあれは暴論である、ひやかしに等しい者である、吾々眞面目に従事して居るものから見ると之れの相手になる價值がないと排斥して一顧を與ふべきでない。併し一面社會が幼稚園に注目する様になつた事は喜ぶべき事で、又一面には社會の幼稚園に對する感想の表はれたものと考へ、之れを比較し研究的に讀む事は最も興味あると同時に、中には世の誤解を招き易い事柄もある。又教育者はかゝる説に對して如何に辯明するがよいか

といふ諸點から、私は之を價值あるものとして聊卑見を述べて見たいと思ふ。但反對者の少なく隨て其意見の少なきを頗る遺憾に思ふ。

さて山脇女史の否定論は先頭第一に掲げられ、又大に誤り易い點もあるから、女史の説を約述して思ふ所を述べて見よう。

1 幼稚園は母親が病身か多忙の爲めに教育の出來ぬ家庭ならば通はせるのも宜しい。

元來幼稚園は西洋を眞似て造つたもので、中流以上のものが通ふから、自分達の子供も通はせぬと、子に對し手をつくさぬかのやうに思はれる虚榮心と、自分が一生懸命に骨折つて立派な人物につくらうといふ熱心の足りない爲、即母親の怠惰からして通はせるものが多い。

2 五六才は人間の最も、大切な時期でこの時の

教育如何によつて其人の生涯はきめられる。其れを他人の手に任せ等閑にするは大なる心得違ひである。中には大勢のなかにまじつたら圭角が取れるなど云はれる人がありますがそれは小學校からで宜いと思ひます。

3 他の子供衆は幼稚園に入つて智恵づいて居る處へ、何も知らずにぼーつとしてゐるのはと苦しむ人もあるが子供の時は少しぼーつとして居る位がよい。

4 私は日本婦人がも少し進んで我子を幼稚園に入れぬやうになられるやう切望して居ます云々  
第一のお説は今の幼稚園に子供を通して居る母親の心を解剖されたものと見られる。健康で、さのみ多忙ならざる母親にして、我が子を入園せしめて居るものは、虚榮心の満ちて居るか怠惰者の何れかであるとの御宣告である。女史は随分思ひ切つて之等の母親を侮辱されたものである。即ち幼稚園は病身と多忙なる母親のために建てられた

ものとして、其他に子供を入園せしむるは母親の罪に歸してあるが、女史は果して幼稚園なるもの、設けられて居る趣旨や現在保育の狀況如何を御存知なのであらうか。女史は唯單に幼稚園なるものを知つて居られぬのではないか。

又女史は入園せしめて居る母親の多數に對し、其入れて居る母の心を御調べになつたのであらうか。單に一二の特例を以て、全般を推したのであるまいか。幼稚園を否定するとせば、少くとも幼稚園の趣旨や目的又は方法について可否を論ずべきである。又母の心が虚榮か怠惰かと非難するならば、宜しく一般的の例を捕へ、具體的に否認するが至當である。幼稚園の何物なるを知らず、二十年前の誤られたる二三の保育狀況をもとにして、しかも相當の社會上の地位を占めて居る婦人に對し、侮辱的の言語を弄された事は教育家として女學校長としての女史の爲に惜むべき事である。  
2 女史は五六才の時期は大切で、其教育如何は

生涯を通じて大なる影響があると認めて居る。この大切な時期なるが故に他人に托してはならぬといふ理由は、何處にあるであらうか。若し此の理由が眞であるならば、小學時代も大切である。小學時代には何故に母の手より若干時を他人に托するか。小學校の教育が母一人にては出来ぬと認められて、而して五六才の大切な時期は母一人で完全出来るものと認められるのであるか。又他人

の手に托する事は（大切な時期故に）危険なり有害なりと云ふ意味になるのであるか、少くとも他人より母に托するが安全なりと云ふ事は、保姆に對し敬意を拂はず信用を措かね事になる。尙若し最も善き意味を以て解釋すれば母の愛母の知母の誠意を以てさへすれば幼稚園の教育は足れりといふ事になる、かゝる婦人が多數に有り得べきや否や人には各々長所がある又缺點もある。母が家庭教育を行ふにも亦長短がある。汽車や電車に乗つて子供を連れて居る母をよく觀察して見ると其長

短が屢々吾人の目に映ずる。その時の吾々の感想は果して如何でせうか。その外にまだ、吾々の目に入らない長所と缺點とが澤山ある。此の缺點を補ふのも保育（一部分であるが）である。

此の缺點も補つて、我子をよき人物につくらうとして入園せしめて居る感心な母親を「他人の手に任せ等閑にする心得違ひである」とのお叱りは餘りに圭角のあり過ぎる、そして家庭に通じて居ないお説ではあるまいか。圭角で思ひ出したが大勢にまじると子供の圭角がとれるといはれるがそれは小學校からでよい」と云はれた。子供に圭角があるでせうか。子供の圭角とはそもそも何をさしたのでせうか。大人には男子も女子も圭角のある人がまゝ見受けられる。女史は子供といふものに關して、もつと御研究が願はしい。子供についての研究が積めば、幼稚園の必要なり目的が自然に分るやうになると思ふ。

3 女史は幼稚園はいろ／＼教へて智恵づけるが

子供はぼつとして居るのはよいと云はれた。大器晩成説は結構であるが、今の幼稚園では知識を注入する様な事は決してありません。又ぼつとして居るといふことは懶巧不懶巧とは意味が違つて居る、こせつくのと懶巧とは別である。

4 日本婦人のもう少し進んで云々は理想の日本婦人を現實にして幼稚園を驅逐せよ、幼稚園の驅逐された時は、やがて日本婦人の進みたる時で、此の時代を切望すると云はれて居る。處で進みたる日本婦人とは如何なる意味でせうか。完全なる或は完全に近き婦人は幼児を教育し得ると假りに致して置いて、かゝる婦人はいつの時代に現實になるでせうか。果して容易く得らるゝでせうか。そういう意味で、いつの世に幼稚園の必要な時代が来るでせうか。かゝる事は一の理想否空想であつて、女史の結論は空論に過ぎないのである。

況んや幼児には自然の發達上社交的本能、國體的本能の表はれる時がある。此の本能を満足せし

むる事は、母一人又は家庭の僅かな人で出来るでせうか。其本能の性質上如何なる賢婦人でも此點の教育者として及第の出来ない事は火を見るより明らかである。

要するに女史は幼稚園や托兒所を深く御存知なく、幼児の生活てふ事も究めずして、しかも入園せしむることを母の多忙、母の病身、母の虚榮、母の怠惰等のみに歸し終はられた事は大なる誤りである。もし女史にして幼稚園を知り兒童生活を研究して居らるゝとせば、女史の掲載されたお説に其一端をも見る事が出来なかつたのが頗る遺憾である。且矛盾の點があるのは不審議と云はねばならぬ。又お説の内に西洋のまねと云はれたが之れは何ぞ否定の意味に關係がないし、「英國人の立派な見識」をたへて居られたが、之れも否定には役立つて居らぬ。これ位の見識は多き日本婦人にも決して無い譯でもなく、其の子を幼稚園に入園せしむるに何等の衝突もあるまい。

近頃は我子を入園せしむる爲に、其園の主義方法を詳しく聞糺して後に幼兒を連れ來る進みたる婦人も尠くなく。又之に對して立派に満足を與ふるだけの考を以て實行して居る保母も澤山ある。

必竟女史のお説には、何等か女史の本意にあらざる誤謬の點もあつたのであらうし、又私も幼兒教育の大切なる事を考へて、公にせられた全體に對し思ふ儘を述べた事を諒せられたい。

さて次に山脇女史の外八名の名士と六人の愛讀者の説を一括して且其の論據を分類すれば次の如き現象が表れる。

(一)否とする説

- 1 母は絶大の力あるものなり
- 2 母は無限の愛を有するが故に教育上絶大の力あり。
- 3 母として最愛の子なるが故に他人に托するは否にり
- 4 家族が入園を賛成するは母の不信任を意味

す

- 5 眞實の力ある教育は母に勝るものなし
- 6 母が入園せしむるは母の不熱心なる故なり
- (子) 1 入園したるものは早熟す

2 入園すれば社交的生活により氣を使ひて心配す

3 自信力乏し(入園したる子供は)

4 入園して知識德行を得るの要なし

(園) 1 幼稚園は壓迫する所なり

2 知識技藝を教ふる所なり

3 窮屈なる所なり

(結果) 1 小學に入りて教師を輕侮す

2 一二年は發達よきも進むに従つて成績上らず

(二)可とする説

(母) 1 母には教育的知識技能なし

2 四六時中母が其子の教養にかゝる事は不可能なり

(子) 1 家庭にあるものは早熟す (特に兄弟少なきもの) に然り)

もの) に然り)

2 大人と同一歩調を取るが故に多方面に知識増して子供らしき知識德行なし

3 一人子は自儘強く意志弱し

(園及) 1 入園せしむれば間食過多の害を受けず

(庭) 2 悪友を避く

3 家庭にありては胃腸を害し身體の發達上障害を來す

4 家庭より直ちに小學に入る境遇の激變と知識を授けらるゝより受くる害は甚多し

5 入園すれば精神界擴張す

6 社交的本能を満足せしむ

7 身體を矯正し得

8 複雑なる生活に入るが故に長所短所明に分かる

9 清潔、物品の整理、時間の整理、社交的知識を得らるゝ

10 惡徳の萌芽を斷ち善徳を助成す

11 幼稚園は知を授けず成長を助成す

12 幼稚園は子供より見ればのびくした所である

13 家庭の缺陷を補ふ

14 運動場なきか都會の子供には必要なり

15 家庭は單調なり

16 上流は箱入、中流は抑壓、下流は野生なり

此の家庭の缺陷は幼稚園によつて救はる。

以上の諸點を一々比較し意見を述ぶる事は限りある紙上の許さぬ所と思ふ。概説すれば否論者は母を以て絶大の力あるもの、愛の大なるのは教育し得るとして論じて居る。中には詭辯を弄したるものもある、之れは取るに至らぬものであるが、母は如何に賢婦であつても幼兒の教育に満足を與ふることは出來ぬ。幼兒の要求が幼稚園を生み出したものである。感覺と云はず本能といはず、身體も意志も感情も其幼兒の年齢に相應して自然に

發達表現するものである。これを満足せしめ調節を與へ助長せしむるには家庭のみにて出來得ざるは明らかなる事實である。幼稚園は其の出來難き家庭の缺陷を補ふこと、即ち幼兒の生活に満足を與へ圓滿なる發達を助成するのである。

可論者の説は幼稚園の性質と必要を述べたのもあるが、其の多くは保育の附帶事項とも申すべきか、家庭と協力したる保育事業の一の現はれを述べてあるのに過ぎない。可論者も幼兒を本位として其根本に立ち入つて否論者を首肯せしむる底の説を多く述べられなかつた事は頗る遺憾とする處である。

## 幼稚園可否の議論

倉 橋 生

○問題はあなたの幼稚園の良否にある。あなたの幼稚園が良ければ、それでよろしい。あなたの幼稚園が悪かつたら、幼稚園そのものを可とする論が百出ても、千出ても、何としようもない。否寧ろ一層進んで言へば、問題はあなた自身である。幼稚園教育は、「幼稚園といふもの」が幼兒を教育して居るのではない。幼稚園に於てあなたが幼兒を教育して居るのである。概念的に議論的に、「幼稚園といふもの」がどうあらうとも、園長たり保母たるあなた如何といふことが、最も具體的な實際問題である。

○幼稚園可否の議論が世間にいろ／＼出るのは、至極く有益なことである。幼稚園に従事するものは之等の説に就て充分に聴き細心に注意し研究すべきである。併し、その聴き方研究し方は局外の